歴史学研究会　創立 90 周年記念シンポジウム　「戦前歴史学」のアリーナ ―1932:歴研が生まれた頃―

2022 年 12 月 18 日

1930 年代の歴史学の「刷新」と黎明期の『歴史学研究』

加藤陽子

１、はじめに

（１）シンポジウムの趣旨

①歴史学研究会（以下、歴研）が創立された 1932 年、会誌『歴史学研究』（以下、『歴研』）が創刊された 1933 年を含む 1930 年代の歴史学の出発点や到達点を確認する。時代認識と歴史学のあり方は不可分。冷戦終結 30 年、新自由主義の隆盛という時代状況をうけ、「戦後歴史学」という言葉で表現された歴史学の内容を再検討する

②1930 年代における多様な歴史学の興隆、新たな担い手たちの誕生を背景にして歴研が創立された意義について、歴研を取り巻いていた内外の学界状況を広く踏まえて検討する

（２）報告者の問題意識

①歴研の「戦前歴史学」の形成に寄与しつつも、さまざまな理由で忘却された歴史家に光を当てることで、「戦前歴史学」のアリーナとしての歴研という場所を史学史上に位置づける

②「戦後歴史学」が想起していた「戦前歴史学」の内容、多様性を明らかにする→戦後、実体とは異なる「仮想敵」を批判、あるいは、過去を「反省」していたという側面はなかったか

２、『歴史学研究』の新しさ　発刊の言葉、表紙・デザイン・グラフ

（１）『歴史学研究』創刊号（1933 年 11 月、四海書房）「生誕のことば」（三島一、後述）執筆

第６連「われらの活動は、今や本誌を通じ、民衆の動向の線われらは「歴史的使命」を帯びて、敢然街頭に立たう。希くは歴史を愛する諸子の協力と批判とを惜しまざらん事を」

（２）遠藤隷兒〔児〕～『歴研』14 号（1934 年 12 月）に「新進の図案家遠藤隷兒氏」[1]の筆。遠藤元男の弟

（３）「グラフ」～モンタージュ等「左翼文化雑誌」[2]からの影響。割付も小林元、杉本勲、松田寿男[3]ら

（４）「雑誌批判」というジャンル

①『歴研』2 号（1933 年 12 月）掲載、無記名「社会経済史学会第三回大会を聞くの記」[4]

「史学会大会がもはや老人の無駄話となり。吾等へのよき催眠剤である今日、僅かにその眠りを醒ますものはこの大会であらう。何等の討論も批判もなき研究発表部会がどうして吾等を導き得やう。吾等はそろゝゝ河岸をかへるべきだ。吾々の自身の大会を持たねばならない」

②同上号掲載、高山五平（遠藤元男のペンネーム）による『歴史公論』批判[5]

「最も権威あるべき『史学雑誌』」は奨められないしね。老人の自己陶酔的な琵琶の弾奏なんか聞いておられないし。『歴史地理』にしたつて去年の重箱の隅のお萩餅の餡なぞほじくるなんていやだしさ。〔中略〕元来その発行所の雄山閣は御存知の通り歴史物の古い出版屋だらう。〔中略〕それらのファンはつまり前に言つた俗流史家・田舎歴史家なのさ」→一方で、地方史の重視、郷土研究雑誌についてのアンテナあり

③『歴研』6 号（1934 年 4 月）掲載、山川三造（野原四郎のペンネーム）による『歴史科学』批判[6]

「マルクス主義の側からする歴史研究を標榜」「特に目に付くのは、朝鮮・台湾・満洲等の植民地問題が寥々たることだ。支那に関するものもさうだ」→「戦後歴史学」批判時にも出される観点

---

[1] 『歴研』14 号（1934 年 12 月）93 頁

[2] 戸邊秀明「『歴史学研究』総目録（1933-2006）解題」『歴史学研究別冊　総目録・索引』（青木書店、2007）6 頁

[3] 山本三郎（満願寺一作）「創刊のころ」『証言　戦後歴史学への道』（青木書店、2012 年）73 頁

[4] 『歴研』2 号（1933 年 12 月）129 頁

[5] 『歴研』2 号、152～153 頁

[6] 『歴研』6 号（1934 年 4 月）492 頁

３、歴史学研究会創立時（1932 年）の時代状況と歴研の位置づけ

（１）昭和天皇が陸軍士官学校の卒業式（1932 年 7 月 11 日）に出席できない[7]時代

『昭和天皇実録』には、前年の 1931 年、後年の 1933 年の記述あり

（２）大久保利謙（1900-1995、日本近代史）による歴研の位置づけ

①大久保「日本の近代史学は明治期に用意され、大正末から昭和にかけてはじめて確立をみたのである。明治時代の史学界はまだ群雄割拠の戦国時代であった。これが一個の学問として統一されたのは大正史学である。そして、この意味の史学の統一を完成せしめたのが、昭和七年に東大関係の少壮歴史家によって結成された歴史学研究会あたりであった」[8]

②上記の大久保の評価についての、解説者・田中彰による読解「著者〔大久保〕が、日本近代史学は明治の二十年代から三十年代にかけて形成され、大正末から昭和にかけて確立したとみていることはさきにもふれたが、それは近代天皇制の確立と展開に密接にからんでいる」[9]

③歴史学は、近代国家の標準装備の一つ

（３）庚午会（1930 年）から歴研創立（1932 年）までの間に庚午会解散騒動（1932 年夏）あり、その後も

①当時の「帝国大学新聞」の話題～学内デモ処分、1933 年から開始予定の日本学術振興会骨子案踊る

②田中正義の回想～「一部の会員が国史のＩ・Ｈ〔堀勇雄〕氏あたりの指令を受けて会内に党への献金者グループを組織するフラクション活動を進めている現在、自由な研究者の団体としての会は即刻解散すべき」[10]

③検挙者　1933 年夏、『唯物論研究』の読者名簿からか[11]。下記以外に、三島一、松田寿男、板野長八も

阿部眞琴（日本史）～「党資金供与」、1933 年 8 月 26 日留保処分決定

野原四郎（東洋史）～「党目遂、資金供与」、1933 年 9 月 27 日留保処分決定

旗田巍（1908-1994、韓国・朝鮮史）～「党・同盟目遂、党資金供与」、1933 年 10 月 18 日留保処分決定

④雑誌を刊行する必要を戸坂潤が板野に助言「会があって〔中略〕世間にその姿を明かにしないのは、却って当局の疑惑を深めさせる。何か対外的活動、例えば雑誌の発行でもやったらよいのではないか」[12]

４、忘れられた「戦前歴史学」の担い手たち

（一）羽仁五郎の場合　「歴史は、根本において、批判である」[13]と言った人

羽仁五郎（1901-1983、日本史）東大法、ハイデルベルク大（リッケルトに歴史哲学学ぶ）、東大文

（１）「回顧と展望」というジャンルの考案者[14]

①1930 年から、事実上の「回顧と展望」というジャンルを考案し[15]、執筆した。羽仁と同学年の臣籍降下皇族・筑波藤麿が私費で発刊した『昭和四年度の国史学界』[16]。翌年も史学理論と経済の項目執筆

②羽仁の目指したもの～「史学雑誌は王さまの話、宮さまの話、やめろといえないから、ブック・レビューからやろうというのだった。僕が、最初に書いたのは平泉批判、「反歴史主義批判」という題で書いた」[17]

---

[7] 奈良武次「回顧録草案」、波多野澄雄・黒沢文貴編『侍従武官長　奈良武次　日記・回顧録』第 4 巻（柏書房、2000 年）169 頁

[8] 『大久保利謙歴史著作集　7　日本近代史学の成立』（吉川弘文館、1988 年、初出 1959 年）60 頁

[9] 同前書 440 頁。なお、歴研創立への大久保の高い評価に気づいたのは前田亮介「「史学統一」の夢―戦前（一九二三～一九四五）の大久保利謙―」、立教大学史学会『史苑』第 82 巻第 1 号（2022 年 3 月）、209 頁

[10] 田中正義「初期『歴研』の追憶」前掲『証言　戦後歴史学への道』210 頁

[11] 阿部と野原は、『昭和前期思想資料』第 1 期（文生書院、1972 年）所収、刑事局思想部『思想月報』第 1 号（昭和 9 年 7 月）、207 頁、263 頁。旗田は、同前所収、刑事局思想部『思想月報』第 2 号、404 頁

[12] 板野長八「歴研の創刊と戸坂潤氏」『歴研半世紀のあゆみ』（青木書店、1982 年）228 頁

[13] 羽仁五郎「歴史および歴史科学」河合栄治郎編『学生と歴史』（日本評論社、1940 年 3 月刊）中の文章。斉藤孝編集・解説『羽仁五郎歴史論抄』（筑摩書房、1986 年）41 頁からの再引用。

[14] 現在は『史学雑誌』5 月号の代名詞となった「回顧と展望」の起源が『歴研』年報号にあったことを初めて指摘したのは前掲戸邊「『歴史学研究』総目録（1933-2006）解題」9 頁

[15] 代々木会編纂、筑波研究室発行『昭和四年の国史学界』。羽仁は「史学理論」と「経済」を担当。代々木会のメンバーは、秋山謙蔵（28 年卒）、浅野長武（20 年卒）、梅田俊一（27 年卒）、大久保利謙（28 年卒）、喜田新六（29 年卒）、坂本太郎（26 年卒）、田山信郎（28 年卒）、筑波藤麿（27 年卒）、羽仁五郎（27 年卒）、原田亨一（26 年卒）、松本信廣、丸山二郎（24 年卒）

[16] 存在が確認できるのは『昭和十年の国史学界』までの各年。『歴史学研究』の年報刊行が 1935 年からであることと関連ありか

[17] 羽仁五郎「歴史学はいかにあるべきか」『歴史評論』137 号（1962 年 1 月）5 頁

（「歴史学はいかにあるべきか」）『歴史評論』137 号、1962 年 1 月、5 頁）

③『昭和五年の歴史学界』の「余言」～「王座に坐して然るべき史学雑誌がいま果してその権威を自認し保持してゐるのであらうか。あまりに時流に投ぜんとし、且つ啓蒙的に堕せんとしてゐる傾向がないであらうか。」、「専門雑誌それ自身の学界に寄与する一の力は新刊著書、論文、其他に対する正しき批評と正しき紹介とであらねばならない」（105～106 頁）。

（2）平泉澄（1895-1984、日本中世史）との格闘のすべを後進に教える～羽仁論文を『史学雑誌』に載せたのは当時史学会学生委員であった秋山謙蔵（後述）。また、羽仁「東洋における資本主義の形成」を『史学雑誌』第 43 編（1932 年）2、3、6、8 号への分載に力あり

①羽仁のクローチェ翻訳『歴史叙述の理論及歴史』。これを平泉は賞める。「今や友人羽仁君によつて翻訳出版せらるゝを見て喜悦禁ずる能はざるものがあり」（1926 年）[18]

②羽仁「反歴史主義批判」[19]論文。これは平泉「歴史に於ける実と真」[20]への批判。平泉は「明治以来の学風は、往々にして実を詮索して能事了れりとした。所謂科学的研究之である。その研究は分析である。分析は解体である。解体は死である。これに反し真を求むるは綜合である。綜合は生である。而して其は科学よりはむしろ芸術である」。羽仁は「芸術はつねに非歴史であつて、歴史を芸術とする主張はかくして常に反歴史主義的である」と述べる[21]。

③羽仁の問いとは～文献学的歴史をどう発展させるか。学問的綜合原理を失うと文化史的反歴史主義となる。綜合原理を「精神」に求める企ては精神主義的歴史であり、これは反歴史主義。「可能なる歴史としての唯物史観の位置」（546 頁）

（3）歴研との関係　創立に向けて

①川崎庸之（1908-1996、日本古代史）「昭和 6 年の春だったと思うが、中村吉治君と一所に羽仁さんの所に行った時、そういう集りがあるならもっと組織立った勉強をしたらどうかと言われた。それから野原〔四郎〕君達と研究会の準備をして、学士会館の室を借りる交渉をした」「座談会　歴研創立のころ」[22]。川崎は戸坂潤と親戚[23]。

②三島一「今井〔登志喜〕先生の影になり、日向になりして会をたすけて下さった事は忘れられない。又、羽仁五郎氏が、外からいろいろ支援してくれた事も特におぼえておきたい。津田〔左右吉〕先生の御好意も忘れられない」[24]。三島は羽仁と府立四中で同級生

（4）検挙　羽仁の検挙は 1933 年、「羽仁五郎手記（唯物史観に対する再認識）」文部省学生部『思想調査資料』第 22 輯（1934 年 3 月）所収。司法大臣同手記送付状（1934 年 2 月 7 日）付

（5）忘却の理由

①井上清、鈴木正四等とともに、1946 年 1 月 27 日、神田教育会館で「各国君主制の歴史」シンポを企画、講演会の終了後、歴研大会とする緊急動議を提出し、羽仁を委員長、津田を会長に

②再建へは別の二つの流れあり

4、（二）三島一の場合　「新たな」東洋史創出の必要

三島一（1897 年～1973 年、中国史）。戦前期を通じて、歴研の会長を務める

---

[18] 平泉澄「クロォチェ「歴史叙述の理論及歴史」『史学雑誌』第 37 編第 12 号（1926 年 12 月）

[19] 『史学雑誌』第 39 編第 6 号（1928 年 6 月）

[20] 『史学雑誌』第 36 編第 5 号（1925 年 5 月）

[21] 羽仁と平泉については、犬丸義一「解説」『羽仁五郎歴史論著作集』第 1 巻所収（青木書店、1967 年）419 頁。

[22] 『歴研』151 号（1951 年 5 月）479 頁。座談会出席者は三島一、川崎庸之、野原四郎、旗田巍の各氏。

[23] 三島一の発言。「川崎庸之さんが戸坂潤氏と親戚なのです。従兄弟か、それで戸坂が〔『唯物論研究』を〕はじめるのでぼくも歴研だけど入らないかと誘われた。だからぼくは一回、三村元というペンネームで書いた。私が引ぱられたのもその年だった」歴史学研究会『歴研半世紀のあゆみ』（青木書店、1982 年）175 頁

[24] 同前、49 頁

（1）『歴研』3 号（1934 年 1 月）掲載、「雑誌批判」として『東洋学報』を執筆[25]

①「東洋史学発達の裏には後藤〔新平〕伯、桂〔太郎〕公の如き人々、特にわが白鳥〔庫吉〕博士の偉大なる貢献があつたこと」は事実（228 頁）

②〔『東洋学報』発刊時の白鳥の講演録を読み直したとして〕「ともかく明治三十八年から四十一年頃と云へば、日本の資本主義が高度の発展を遂げ、国外に盛んに市場を求めて居た時分なんです。何か冥々の中に黙契はあつたんぢやないでせうか。学者の仕事も一見書斎の中丈に限られてるかに見えますが、仲々そんなものぢあなく、またあつてはならないと云ふ人も居るのです」（228 頁）

③「われゝの先輩が、この満鉄の調査報告及び東洋学報によつて数多の貴重な業績を挙げ来つた事は一世の注目する事でありまして、この両学術報告は、その当初以来の執筆者の顔触れから見ましても、研究対象が満鮮蒙乃至は西域の歴史地理的方面に主として注がれたやうに見える点から考へましても、余程共通性があつた様に思はれるのですが、如何でせう」（229 頁）

④「最近時々『東洋学報は化石して（ママ）居る』と云ふ事を、不幸、耳にします。〔中略〕佳人当に新粧すべき時です。況んやこの廿一年間日本も変りました。世界も大いに変りつゝあります」（230 頁）

（2）三島の「歴史学研究停刊に際して」～「翻て惟ふに過去十数星霜、若き歴史学徒の学問的情勢を結集して学界に一新生面を開き、この間幾多の優秀なる新鋭学徒を学界に送つた我が会の足跡は夙に遍く人の知るところであり、静かに過ぎし方を顧みれば萬感胸に迫るを禁じ得ないが、輝かしき戦勝獲得のためとあれば、安んじてこの途をとりうるのである」[26]

4、（三）秋山謙蔵の場合　歴史を綜合するハブとして

秋山謙蔵（1903-1978、日中交渉史、中世史）、志田不動麿の後、1935 年頃の幹事長、右旋回、戦後公職追放

（1）『史学雑誌』の学生委員として、羽仁「東洋に於ける資本主義の形成」を『史学雑誌』第 43 編（1932 年）2、3、6、8 号への分載に力あり

（2）秋山「「徒然草」と拝金思想」、『歴研』3 号（1934 年 1 月）掲載
小川剛生『兼好法師　徒然草に記されなかった真実』（中公新書、2017 年）の内容の一部、先取り

（3）歴研創設、就職難の時代、平凡社『世界歴史大系』全 24 巻中の東洋史、日本史の巻の執筆者を組織

（4）秋山「明治の史学と昭和の歴史学」、『歴研』6 号（1934 年 4 月）掲載→史学と歴史学の区別

4、（四）林健太郎の場合　一次大戦時の歴史家像に学び、ヒトラー時代の雑誌統制に備える

林健太郎（1913-2004、ドイツ史）の場合　戦後、東大文学部長、総長、参議院議員

（1）歴研との関わり

①『歴研』創立 10 周年記念特輯（テーマ「近代歴史学」）を編輯[27]

②『歴研』発売所の変更（蛍雪書院〔この書店で発売された号は皇紀で年号が書かれた〕→岩波書店〔この書店に発売所が変わると、昭和で年号が書かれた〕）の責に任じた

③1943 年 12 月幹事長。1944 年 6 月に前幹事長・鈴木俊が検挙[28]されたことをうけ、停刊時は幹事長として対応

（2）ペンネームでの多数の寄稿、歴史学者の身の処し方、歴史系雑誌のあり方を歴史から示唆

①「平川生」というペンネームで、S・B・フェイの論文「凋落途上のドイツの学術」を翻訳[29]。*Current History* April, 1936。訳文中の重要なポイント。「ヒットラーが政権を握つて以後、ドイツに於て西欧世界の一般的標準より見たる学術的自由、健全なる学問、真実の学者精神が悲しむ可き程度に傷けられた事は疑

---

[25] 『歴研』3 号（1934 年 1 月）228～230 頁

[26] 『歴研』121 号（1944 年 12 月）56 頁

[27] 「編輯後記」『歴研』105 号（1942 年 12 月）

[28] 「解説にかえて　座談会　三島一先生の人と学問」中の遠山茂樹、野原四郎の発言によれば、鈴木俊は教育科学研究会の城戸幡太郎の関係から検挙。三島一『中国史と日本』（新評論、1977 年）399 頁、412 頁

[29] 『歴研』33 号（1936 年 7 月）

がない」「彼等が常にナチの学生及び警察の監視の下にあると云ふ事実は彼等の心の平静に大なる動揺を与へ真の学者的仕事を行ふ事を困難に」し。「ドイツの学術雑誌に於ける学者の発表は量、質共に驚くべき程度に減少しつゝある」89 頁

②平川省三（林健太郎）「「嵐の中の」史学」を『歴研』35 号（1936 年 9 月）に掲載

「永年の伝統を持つこの二つの雑誌が、「帝国学術省」の命令によつて合同されやうとしてゐることである。だが何故さうしなければならないのか、ドイツの歴史科学の一つの大なる中央機関をつくる「実際的理由」が何処にあるのか、については吾々依然としてわからない」。ドイツの「東欧史雑誌」の変貌については、「名だゝる歴史家の名前が一人残らず編輯者から消えてゐる。本屋は「内容を拡張した」と云つてゐるが、副題にある様に対象が専ら『教会史及精神史』に限られ為めかへつた内容は縮少され、定価が安くなった代りに頁数はずつと減つてゐる。〔中略〕とにかくこの方面に関する政治史、社会経済史の最高権威とされ、時にソヴェートの紹介などもやつたこの雑誌が、こんな姿になつた事に対して淋しさを感ずる人も少くはないだらう」（ともに 23 頁）

③梶光之介（林健太郎）「世界大戦とドイツの学者たち」『回顧と展望』、『歴研』44 号（1937 年 6 月）掲載

「今日世界大戦については既に甚だ多くの事が語られてゐる。だが以下此処に語らうとする戦争の一側面については、案外知らない人が多いのではなからうか」「今や第二次世界大戦の聲が各所に聞かれる時、こんな事柄をふり反つて見るのも一寸面白い事ではないかと思はれる」（75 頁）

５、論文や「編輯後記」を責任の観点から読む

（１）誰なのか

①風間泰男の場合～「編輯後記」『歴研』68 号（1939 年 8 月）「少壮学徒の相互錬磨を目的とする同人雑誌的傾向を以て生誕した『歴研』は過去六年の歳月に、内には会員の飛躍的増大と共に学界に巨大な足跡を印し中堅的権威に迄生長し、外には、多難なる時局の波濤を迎へて、今こそ生誕以来の同人的傾向の残滓を清算し、社会的組織にまで自らを高める事によつて斯学への積極的貢献と、知識社会への啓蒙に新なる出発を求めねばならぬ」

②風間の場合～「特輯　昨年度史学会　回顧と展望」日本史篇の「総論」、『歴研』76 号（1940 年 4 月）「いかに国家が大きな苦しみに悶へ、同胞が歴史の智識を要求しても、さうした世俗に超然とする事を以て学徒の本分をなし、それを以て学問の自由・独立と呼ぶ旧態アカデミズムの聲が、尚我々もの身辺に聞えて居ないだらうか。現実の社会の動きから離れて学問の自由一般などと言ふものはあり得るものではないし、若し有つたとしたら、それは問題にされない自由の学問であり、現実の社会から隔絶した学問の独立とは忘れられた孤立の学問の事に外ならない」（9 頁）

（２）革命としての戦争の「側面」に惹かれて

①林基の場合～「編輯後記」『歴研』95 号（1942 年 1 月）「歴史の推移はまことに変転きはまりない。昨日独ソの開戦に驚いた我々は、今や自ら「大東亜戦争」の渦中にある。実質的には満洲事変の年に生誕したところの歴研はその更生の門出に於いて世界史的な大転換に奇しくも再び相会することになつた。」「あれ程の戦術上の大変革をなしとげ得た我が民族のエネルギーと、更に歴研従来の伝統とを以てすれば、当然それは可能であると思はれる。ともあれ本年度に於いて歴研も亦飛躍的な研究成果をあげ、以て緒戦における皇軍の大戦果にいさゝかあやかるところありたいものである」

②市古宙三の場合～「編輯後記」『歴研』96 号（1942 年 2 月）「肇国以来こゝに二千六百年。戦捷の報を耳にしつゝ紀元の佳節を寿ぐ我々の感慨は一しほ新たである」

③倉橋文雄の場合～「編輯後記」『歴研』97 号（1942 年 3 月）「昭南島に日章旗ひるがへる。われらはこの大勝利を心から慶祝すると共に、学徒たる本分に従つて益々研鑽を怠らず学問報国の道により前線将士の御労苦に応へなければならぬ」「今や日本は一方において未曾有の大戦争を行ひつつ、他方において壮大なる大建設に当つてゐるのであつて」

④遠山茂樹の場合～「編輯後記」『歴研』103 号（1942 年 9 月）「皇軍の輝かしい戦果に伴つて、大東亜建設

の大業も着々とその緒についてゆく。この現実の逞しい発展は従来の日本文化の全面的な再検討を要請してゐるかに思はれる」

6、戦後歴史学の光の中で

（1）永原慶二（1922-2004、日本中世史）

①歴史学研究会を永原は、「自由な有志の研究会という基本的性格をもち、なかには秋山謙蔵のように、戦時中には大きく右旋回した人も加わっていた〔中略〕雰囲気的には当時力を伸ばしつつあったマルクス歴史学に共感ないし関心をもちつつ、しかしそれを「主義」として標榜するのではなく、まったく自由な、しかし台頭しつつある皇国史観など国家主義的傾向には明確に反対する、という性質をもったのである」[30]

②永原は『歴史学研究会　四十年のあゆみ』時（1972 年）の「「歴研」創立の前後」という座談会に、秋山を出席させる

③創立者が亡くなる前に創立事情を明らかにしたいとの永原の意志で 40 周年記念誌が編まれた [31]

（2）一般名詞ではない「戦後歴史学」。「戦後歴史学」に付与された多様な意味

①井上清「戦後歴史学の反省と当面する課題―失敗から学ぶ一提案」『歴史学研究』230 号（1959 年 6 月）ここで井上が「戦後歴史学」という名辞を自称として用いたこと、その最初の例としての意義を見出したのは戸邊秀明「社会運動史としての戦後歴史学研究のために―史学史の再検討にむけたいくつかの提言―」『日本史研究』600 号（2012 年 8 月）。戸邊は、井上らが外部からの批判に対して、「「科学性」を強調する防衛に走り、社会構成体論と階級闘争を歴史の主軸とする公式の正しさを僭称するようになる」と見て、「「戦後歴史学」とは、このように設定しなおされた枠組みに、五〇年代末に与えられた新たな自称だった」（201 頁）と定義

②この井上清の「戦後歴史学」の用い方については、大門正克のまとめも参考になる [32]

③永原慶二が考えた「戦後歴史学」とは～「マルクス歴史学と近代主義歴史学の問題関心と方法を基軸としてめざましく展開」[33]

（3）「戦後歴史学」の批判的検討が開始された

①安田常雄「方法についての断章―序にかえて―」[34]

②西川長夫「戦後歴史学と国民国家論」[35]～「戦後歴史学は国民国家それ自体を批判の対象にすえることができなかった」(80 頁)、「戦後歴史学のなかで国民と国民国家が批判の対象をまぬがれた」（84 頁）

（4）戦後歴史学の批判的総括　1999 年度　日本史研究会大会　全体会シンポジウム「戦後歴史学総括―時空の文節化とその方法―」[36]『日本史研究』451 号（2000 年 3 月）

①小路田泰直「戦後歴史学を総括するために」同前号所収～歴史学研究会や日本史研究会など、戦前期歴史学の総括（自己批判）を行ってこなかった。また、戦後歴史学は、市民主義的歴史学の問いかけに答えない。「自分達はなぜ侵略戦争をし敗北したのかとの問い」（9 頁）に答えなかった

②もう一度、「戦後選択のやり直しを行ってみるしかない」（18 頁）

③再建時の対立の構造を見直す

7、黎明期の『歴史学研究』の内容を検討してわかったこと

部会の役割、協同研究の大事さ～「かつて、十名内外の会員のサロンとして出発した当時の歴史学研究会は、只それだけであつたことのために、サロンの報告や話題が直接に会誌に反映され、このサロン自身が会の内容の発展のうへに重要な進歩的役割を演じたのだ」『歴研』50 号（1938 年 1 月）「回顧と展望」号 67 頁

---

[30] 永原慶二『20 世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、2003 年）111 頁

[31] 小谷汪之の証言。参照『「人文知の危機」と歴史学　歴史学研究会創立 90 周年記念』（績文堂出版、2022 年）98 頁

[32] 大門正克「解題―歴史学研究会の証言を読むために」前掲『証言　戦後歴史学への道』35 頁

[33] 前掲永原『20 世紀日本の歴史学』166 頁

[34] 歴史学研究会編『戦後歴史学再考　「国民史」を超えて』（青木書店、2000 年）所収

[35] 同前書所収

[36] 『日本史研究』451 号（2000 年 3 月）